

---

# デイリーメイカーズ

加島神楽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デイリーメイカーズ

### 【NZコード】

N5848Y

### 【作者名】

加島神楽

### 【あらすじ】

中学三年生の春。

この学校に転校してきた紅咲夜は、教室の空気に馴染めずにいた。そんなある日、ふとした出来事で出会った少年少女の五人組。その出会いを堺に、彼の人生は大きく回りだす。

転校を余儀なくされた、咲夜の残酷な過去。  
そして……そこに刻まれたのは幾多もの過去が重なつた『呪い』。

「ねつ、すじこでしょ。咲夜君」

「お前自身も気づいただろ。何かを我慢してここと……いや、

本当はそれを望んでたこと」

「私たちのじこが変なのよー!?

「わかつたようにいうなー!?

「僕のどこが素直じゃないって言つんだ」

「どうして……お前のギターから出る音は、そんなにも悲しそうなんだよ」

「じゃあ何で我慢するー?何をおそれてこるー?何におびえているんだ!?

「彼ひが過ごした青春時代が、今、始まる。」

『デイリーメイカーズ』

この作品は電子書籍サイト、E-ブリスタにも投稿していますので、よろしければそちらの方もお願いいいたします。

## 1-1 五人との出会い（前書き）

この作品はあくまでフィンクションです。  
実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定  
される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません  
ん。

## 1・1 五人との出会い

それはまだ、奇跡が起ころる前の話。彼女が生まれる前の話だ。

田が覚めると、丁度4時間田の終わりのチャイムがなつていた。  
どうやら授業は終わつたらしい。

周りのクラスメイトが、それぞれ友人と昼食を食べよつと動き出す。

僕はその姿を見ながら一人、いつもの場所へと向かう準備をしていた。

くれないさくや  
紅昨夜。それが僕の名前だ。

中学三年生の春、この学校の3年2組に転校してきた。  
はじめは転校生ということもあり、たくさんの人と話しかけられたのだが、人付き合いの苦手な僕の性格がわかると、だんだんと話しかけてくる人も少なくなり、なんとなくクラスになじめない状態になつっていた。

けれど元々、誰かと一緒にいることが少なかつた僕はあまり気にせず、転校時からずっと一人の生活を送つているのだ。

屋上へつながる扉の前にたどり着く。

僕が向かつていたいつもの場所というのは屋上だ。

この学校の屋上は封鎖されていて、誰も入ることができない絶好のスポットなのだ。

僕はその扉のすぐ隣にある窓をふさいでいる鉄格子をはずし、窓から屋上へと出る。

封鎖されていないじゃないかと思つたかもしけないが、確かに僕

が来るまではこの窓も封鎖されていたのだ。

僕がこここの鉄格子のねじをドライバーで外したから、ここだけは通れるのだ。

降り注ぐ太陽の光、吹き抜ける心地の良い風、時より聞こえる小鳥の鳴き声。ここはいつも来ても素晴らしい場所だ。

窓から屋上へと出た僕は、いつもの貯水槽のところに腰を掛け、昼食を食べ始めた。

昼食を食べ終えた僕は、腰掛けている貯水槽の下に手を伸ばし、中からギターとパイプ椅子を取り出した。

ギターはアコースティックギター。小さいところから続いている僕の趣味の一つだ。

静かな屋上で木々のざわめきを聞きながら弾くギター。心休まる時間だった。

一曲目を引き終える。調子はますますだ。

そろそろまた、新しい曲にでも挑戦しようかな。そんなことを考えていた時だった。

「ねつ、すごいですよ。咲夜くん」

「ああ……これは想像以上だ」

「屋上への行き方を知っているあたり、只者ではないと思つていた

が

「くちやくちやす」いな

「みんな……あんまり大きな声を出すと、ばれちゃうよ」

……人の……声？

そのことを理解すると同時に、自分が屋上にいることがばれていたことにも気づく。

いつからいたのだろうか。いや、いつから個の屋上に通っていたことを知っていたのだろうか。

まあ考えて仕方がない。そう思つた僕は、どこかに隠れている誰かに声をかけた。

「……誰かいるの？」

少々警戒の念を含めてみる。

すると、貯水槽の裏から、物音や話し声（といつより叫び声）が聞こえたと思つたら、その集団の一人から返事が来た。

「ばれたもんは仕方ねえ。……おまえら、いくぞ！…」

「もうみんないいてるよ」

「つてなんでだよ！？」

。 。 。

非常にぐだぐだな集団だった。

意味不明なやり取りの後、貯水槽から大きな物音がしたと思ったら、今度は真上から声がした。

「上を見なさい！…」

言われた通り、貯水槽の上を見てみる。

すると上には、五人の男女が立つていた。そのうち、一人の少女には見覚えがあった。クラスで、アイドルのように呼ばれていた覚えがあるからだ。

その五人が、いきなり変なことを言い出した。

「俺の心が真っ赤に燃える！！ レッド！！」

「自然を大切に！！ グリーン！！」

「いつも心に静寂を……。 ブルー！！」

「ネコと遊んでくれないか？ イエロー？」

「みんなのヒロイン ピンク……って僕男だよ！？」

「五人合わせて」

「シンケンジャー！！」「ボウケンジャー！！」「ゴーカイジャー！！」「ネコレンジャー！！」「デカレンジャー！！」

……。

「『』は侍戦隊だろ」「轟轟戦隊よ！」「いや、海賊戦隊だろ」「なにいつてる。爆猫戦隊だろ！」「爆猫戦隊なんてないよね」

……。

唚然としていた。正直、馬鹿なんじゃないかと思つた。

田の前であーだーだいつてる人たちは、本当に何がしたいんだ  
うう。

「ああ……咲夜くん、もうあきれかえつてるよ……」

「まずいな……登場にインパクトを持たせ、そのままのりで勧誘してしまえ作戦が失敗だ……」

「元々この作戦、無理があつたと思うのだけど」

「アホだな」

いや、あるいはその作戦は成功だ。インパクトはハンパなかつた。  
……といふか、今勧誘つて言わなかつた？

「やあ、お前が紅咲夜か？」

「まあ、そりだけど……」

「俺の名前は風上一也。かざかみかずや隣のクラス、三組の者だ

レッドが自己紹介をする。

「同じく、みやざわけいすけ富沢慶助だ」

ブルーが言う。なんか某有名作家に似た名前だな。

「えーと。なおえりく同じく直枝陸です。よろしく」

なぜか男なのにピンクの人が言う。ピンクだが、一番まともそう  
だ。

「イエローのあかねみさ茜美紗だ」

先に宣言してくれたのは、唯一謎の爆猫戦隊を作り上げた女の子  
だ。ちなみに美少女。そして……

「私の名前は……わかるか。ま、でも一応。同じクラスの夢桜沙耶。ゆめざくらさや  
よろしくね」

グリーンであり、クラスでアイドルと名高い彼女が最後に囁く。  
アイドルと言われるだけあるかわいさだ。

けれど、今はそんなことすらどうでもよくなる事態が起こつてい

た。頭の中は疑問でいっぱい、聞きたいことは山ほどあった。  
だから僕はとりあえず、今世紀最大の疑問をぶつけました。

「ここで何してるんですか」

「勧誘やー。」

すいこわやかに返された。

「誰ですか」

「お前のことをだー！」

「…………何故に？」

「それはお前もわかつてのはずだぜー。」

なぜさわやかに返し続ける。

しかし、僕もわかつている？ どうこいつとだらう。

僕がした事かな。でも僕は屋上に入ったことくらいしか……あー。

「すいません。ここへの先着で僕を口止めに殺しに来たんですね」

「こやいやいや」

「やうだ」

「なに美紗も嘘言つてるのやー。」

どうやら違つたらしい。けれど他に心当たつなんてないぞ。

「他には何かないか」

「すいません。正直あなたたちのような変な人との関わりなんて、あつた気がまるでしないんです」

とうあえず、正直に言つてみた。

とたんに夢桜さんから反讐がくる。

「私たちの『ジ』が変なのよー!？」

「主に言動が」

「まあ的確だね……」

五人の中で、一番常識的そうな直枝くんが賛同してくれる。ちやんとわかってる人もいるんだ。

「まあ、あなたにもいざれわかる口が来るわ」

一生わからたくないです。

「俺たちがお前を誘う目的……それはそのギターの上弾かど、屋上に入る手段を知っているからだーー！」

「ぶつちやけ、後者の止めのウエイトがほとどビですよね」

「まあなーー！」

さわやかに正直な人だ。そういえば、

「ならあなたは『ジ』って入ったんですか」

「……来てみる」

そういうて、僕を貯水槽の裏へと誘導する。僕は黙つてついていく、裏側を見た瞬間驚愕した。

なんとそこだけフェンスが破れており、下の階の空き教室のベランダまでロープがついていたのだ。

「俺たちは『れ』を上つて、ここに来ているんだ」

「危ないでしょー!？」

「だからこそ、お前に入つてもういたいのぞ」

「確かにこれは危ない。いくら屋上がいい場所であるからといって、ここまで危険を冒して来ようと思つた人がいるだろうか。いや、まあ田の前にいるのだが。ここまでする人なんだ。それだけ屋上が好きつて事なのだろう。ここまであげてもいいかな。教えてあげてもいいかな。」

そう結論づけたところで、一つ疑問が浮かぶ。

「屋上への入り方を教えるのはかまわない。けど一つ、質問があるんだ」

「ん? なんだ?」

「どうしてそんなに勧誘にこだわるの? 別に、僕に尋ねるだけでもいいこと思つたんだ」

そう尋ねると、風上くんはすこしうまじめな顔をしていった。

「お前、転校生だったよな」

その瞬間、僕は少し気分が悪くなつた。ここにちらも一緒になかと。

「別に俺たちは、お前の性格にどうこう言つてもりはない。けどな

「強がりはよした方がいいと思つた」

「あんた等も一緒に、そつやつて友達を作れとか、そんなありきたりなことを説教するのか」

「いや、ちがう。俺が言いたいのは、ただもつと素直になつても良いとおもつんだよ」

「僕のどこが素直じゃないって言つんだ」

みんなそうこうんだ。僕の事など何も知らず、ただただそりつんだ。

「じゃあどうして……お前のギターから出る音は、そんなにも悲しそうなんだよ」

僕のギターの……音が悲しかつ?

「たつた一回盗み聞きしたくらいで、僕のギターに口出しありで」「たつた一回じゃない。初めてお前が屋上に来ていたとき……始業式の日から、毎日聞いてる奴が言つてゐんだよ」

「毎日……聞いてる……？」

「あたしよ」

夢桜さんの声が響く。夢桜さんは……毎日聞いていた……？

「あの日、私はたまたま一人、屋上へと登つていたの。誰かいるなんて、思つてもいなかつた。私はこれを、自分だけの楽しみにしようと思つた。それだけ、あなたの曲はすばらしかつたわ」

……驚きだつた。あの日からずっとこたなんて。気付かもしなかつた。

「それから毎日、私は昼休みに、同じはじめの曲だけを聞いていたわ。それ以外の時間は、みんなと遊ぶ時間だつたから。そうして聞いているうちに、私は疑問に思つたの。どうしてこの人の曲は、こんなにも悲しいんだろうつて。

「さつき咲夜くんの弾いていた曲つて、おそらくだけ自分で作だよね」

直枝君が尋ねてくる。僕は肯定の意を示す。

「やつぱりだ。だからこゝや、よりこつそつ自分の心が曲こ出でいたんだ。自分で作った曲ほど、気持ちのでやすいものはないからね」

「だから……僕は別に」

「そんなこと思つていのいといつのか？本当にそうなのか？お前はそうやって、自分の中で何かを怖がつてゐるんじゃないのか？」

「怖がつてゐる……何かに……？」

「俺はお前が、心から孤独を望んでいるよつては見えない。お前は何かをおそれ、自分すら騙せない嘘で自分を守つてゐるよつにしか見えないんだ」

「そんなもの……！？」

「ないわけない！お前は、本当はみんなといたいんだろう！？みんなと笑つて、みんなとはしゃいで、今を楽しみたいんだろう！？じやあ何で我慢する！？何をおそれている！？何におびえているんだ！？」

「そんなこと、君たちには関係ないだろ！？」

僕はそういうて、屋上から逃げるよつにして校舎内に入る。けれど、その行動自体が一つの答えにもなつっていた。

「彼らに……僕のことなんて、わかつてたまるか」

「さすがに、いきなりすぎたか……」

「さすがに、いきなりすぎたか……」

「一也はやつやつて、こつも急ぐ癖があるからね」「もう少し、ゆっくりやつしていくべきだつただるひ」「まあ過ぎてしまつたことは仕方ないわよ。それより、これからどうするのよ？あの調子じや、かなりきつこものがあると思つわよ」「あいつ、そーとー警戒してくるはずだ」「大丈夫だ。作戦は練つてある」「どんな作戦よ？」「それはだな……」

## 1・1 五人との出会い（後書き）

この度は本作品をお開きになつてください、まことにありがとうございます。

私自身が書く初めての作品『デイリーメイカーズ』。

更新は不定期ではありますが、是非読み続けていただけたら幸いです。

## 1 - 2 真実までの迷走劇（前書き）

この作品はあくまでフィンクションです。  
実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定  
される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません  
ん。

## 1・2 真実までの迷走劇

変な連中に出会つたあの日から10時間以上経過した。用は次の日の朝だ。正直気分は全く優れなかつた。

あの連中に会つかもしれないという気持ちもあつたが、それ以上に夢桜さんとの接触が一番怖かつた。昨日が昨日だ。怒つている可能性だつてある。

世の中たいていの男は美少女に従うものであり、クラスのアイドルでもある彼女が、もしも僕のことを気に入らないと一言でもいつたら……本格的ないじめにでもなるかな。

教科書破りとかに耐えられるほど、俺の心は強くないんだけどなあ。

そんなこんな考えているうちに教室にたどり着いた僕は、教室内の全批判視線を浴びる覚悟を決め教室にはいると

夢桜さんが僕の机で寝てました。

「は？なにこの状況？席を間違え……いやいやそんなはずはない。

とすればあの連中の仕業だらう。ならば最善策は無視。

そう心に決め僕の机に鞄を置き、競歩選手ばりの速度で通り過ぎようとしたとや、「

「ちゅうと無視はひビコじょつー昨日の夜をざわざやつておこつ

！」

……。

何といつ爆弾発言でしょ。教室の時間を一瞬にして止めてしまった。

「あんなに恥ずかしい思いをさせて……私だって初めてだつたんだから」

停止時間延長……。

どうやら彼女には、時を止める力があるようだす。あと僕の心の平穀を侵す力。

「…………」

止まつていたときが動き出した瞬間、一斉に叫ばれました。お前たちが叫んでんじやねーよ……僕だつて叫びたいわ……

「なんでことしてくれてんのさああ……」

はい叫びました。叫びましたよ。叫ばずにはいられないじゃないですか。

「だつて咲夜くんがあのまんま私を放置していつたせいで、後処理大変だつたんだから「ちょっとこいつちに来てもらつてもいい」ってやだ咲夜くん、大胆なんだからもう」

なんかさらに話しあしたので、その夢桜さんの手首をつかみ、全速力で教室から引っ張りだした。

後ろからすごい勢いで叫びのよなものが聞こえてきたけれど、全部聞こえないふりをさせてもらつた。

「ひつちだつて理解不能なんだ。答えられるわけがないのに。

「で、何であんな事をしたんですか。夢桜さん」

夢桜さんを引っ張つて教室を出た後、僕はその勢いで裏庭へと来ていた。

木々に囲まれたこの場所は、人がめったに来ない場所。ましてや、HR前にわざわざ来る人などいるわけがないため、僕はここに連れてくることにしたのだ。

「私は事実しかいってないわよ

「言い方つてものがあるでしょー!?」

あれじやあ、誤解してくださいっていってるようなものだ!!

「だつてわざとだもん

「確信犯かいー!!」

もうむちやくちゃだつた。

絶対に関わるまいと思っていた朝の決意など、いつの間にか月の裏まで飛んでいっていた。

「で……こんな事をしてまで呼び出すつて事は、また昨日の集団が  
らみだる」

「「」明察だな」

後ろから突然声がしたと思ったら、いつの間にか、風上が後ろに立っていた。

「僕を社会的に抹殺できるような行為までして、ジツコツじだへ。」

「あれ、いい作戦だろ」

「こつちは大迷惑だ！！ おかげでいやな注目を浴びたよ」

「ははは。お前も俺たちのチームに入れば、こんな事当たり前になるわ」

「……何度も言つてる。入る気はない」

「まあそう言つたな。お前に用があるんだ。屋上まで来てもらいたい」

「……断るといつたら」

「力付くで」

無言の緊張が漂う。

僕はこいつを殴つて逃げようか考えた。それくらいの腕はあるつもりだ。

20

「具体的にはこいつで、沙耶に咲夜に襲われたとでも叫ばせる…」

「卑怯だろ！？ 力付くつてそう言つ意味か…」

逃げようがないだろうが…！」

「決まつたな。昼休み、ついてきてもらひや」

風上くんはそう言って、僕に背を向け歩き去つて行った。  
……どうやら、行くしかないようにだな。

「無理矢理やつちやつて『めんね』

落胆している僕に、後ろから夢桜さんが謝罪を入れる。

「いいよ別に。ただ、だから何があるってわけじゃないけど

「……わざと入ってくれると信じてるわ」

「…………」勝手に信じてください」

意志を変える気はなかった。

だって僕は、そんなこと許された人間じゃないのだから。

「ところで、夢桜さん的にあの発言は大丈夫なの

「あはは……あとが大変そうだわね……」

「…………」

じゃあそんな作戦やるなよ。

↓ spot channel

昼休み。風上くんと夢桜さんにつれられ屋上に来ると、昨日いたメンバーが全員集まっていた。

「遅かったな、一也」

「待ちくたびれたぞ」

「咲夜くん。無理矢理呼び出しじめんね」

三人がそれぞれ声をかける。と、いうか、悪いと思つなら呼び出さないでくれ。

「さて、みんなそろつたことだし、咲夜の演奏会を始めるか

「…………はい？」

「咲夜くんの演奏会よ」

「いや、別に聞き取れなかつた訳じゃ……なんで」

「俺たちが聞きたいからだよ」

「……まあいい。嫌だといってあきらめるような連中じゃないだろうしな」

「まあな」

そんなところを認めるなよ。

僕は心中でそう突っ込んでおき、ギターを取り出した。

「それじゃあ……何かリクエストは？」

「……「いつもので」」「」」

五人の意見が一致する。

……お前等打ち合わせしてただろう。そして僕はバーテンか。

「……了解しました」

そして僕は弾き始めた。

いつも通りにギターを弾く。一いつじて人の前で弾くのも、久しづりなものだ。

あの一件以来、人と関わることがなかつたから。

演奏をしながら、僕は目の前の五人の顔を眺めてみる。

左側に座っている宮沢は、目をつぶり、まるで瞑想をしているかのように戦っている。

右側の茜さんは、眠たそうな顔で……いや、寝てるよ。

そんな茜さんに、直枝は必死で起きるように耳打ちしている。あ、

茜さん起きた。なんかすまなそうな顔をしてる。

宮沢の隣に座る夢桜さんは、すじっこきらきらした目でこっちを見ている。

悪霊を一瞬にして浄化されそうなくらいのきらめいた。僕に向けるにまつたいない。むしろ僕が浄化されそう。

そして、一番はじめに真ん中に陣取った風上は、優しい田をしながら僕の演奏を聞いていた。

……なんだろう。すごい懐かしい風景だ。

あの時も、みんなこんな風に聞いていたな……。

昔のことを思い出してしまったからだろうか。僕は柄でもなく泣き出しそうになってしまつ。

けれど、こんなところで泣くわけには行かないと、涙を我慢して演奏を続けようとした。

だがしかし、そんな状態で引き続けることができるはずもなく、僕は演奏を止めてしまう。

……こんな事になつたのは初めてだった。

「……そういうことだ、咲夜

不意に、僕に声がかかる。僕が顔を上げると、田の前に五人が立つていた。

「そういうこと……って」

「お前自身も気づいただろ。何かを我慢してたこと……いや、本当はそれを望んでたこと」「……」

「……」

僕は田の前の男……風上にすべてを悟りってしまったような気がした。

それは僕のまつとも知られたくない……まつとも思い出したくない部分だと考えつぐのに、そう時間はからなかつた。

「わかったようにこうなーー！」

脳内が不安と恐怖に支配された僕は、気がついたら風上に殴りかかっていた。

だが、そんな錯乱状態の攻撃が当たるはずもなく、あっけなく避けられてしまい、僕はその場で膝を突いてしまう。

そのことに対するショックもあつただろう。

僕は決していう必要の無かつた事実を、まるで自分を苦しめたいかのよう、勝手に叫びだしていた。

「みんな死んだんだよーー僕と関わったせいでの、みんな死んじやつたんだーー！」

### 1・3 テイリーメイカーズ（前書き）

この作品はあくまでフィンクションです。  
実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定  
される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません  
ん。

### 1・3 テイリー・マイカーズ

「僕だつてみんなと一緒にいたいよ！！みんなと笑つていてたいよ！でもそうしたら、みんな死んじゃうんだよ！！僕の両親は九歳の時に、事故で亡くなつた。小学校の頃の親友も、通り魔に刺されて死んじゃつた。中学の頃のクラスメイトは、僕が休んだ学年旅行でみんな死んだ。僕と仲良くなした人は……みんな死んじゃつたんだよ！」

この学校に引っ越してきた理由も、僕以外のクラスメイトが全員亡くなつてしまつたから。  
いわば、やつかい払いのような形でここへ来たのだ。

「…………」

屋上が沈黙に支配される。

さすがに、誰も声が出せなかつたようだ。  
今更になつて、後悔の念が押し寄せてくる。言う必要はあつたのかと。

そうして数分、その沈黙を破つたのは直枝だつた。

「僕の両親もね……もう死んでいるんだ」

「えつ…………」

「君より少し後の、十歳の頃に。ぼくもね……そのときは一人、家の中に引きこもつた。家のカーテンを閉め、暗い部屋の隅、ずっと親の写真を見つめていたんだ。そのときの僕は、何もかもに絶望していた。けど、その状態から救つてくれたのが一也たちだつたんだ

「……からは俺が代わるつ。俺はあの日、ふとした噂を聞いたんだ。

両親を亡くした少年の話を。俺は最初、興味本位でそこを訪ねた。その頃、俺は両親のことが嫌いだつたからな。その両親を失うどうなるのか、興味があつたんだろうな」「

Side - kazuya

(ここがその部屋だな)

俺はその扉を開け、中に入る。

(だれもいないのか  
……?)

周囲を見回してみると、はじめは見つからなかつたが、よく見てみると……

..... )

部屋の片隅に佇む少年を見つけた。

その少年は全く動じることなく、何を見ても  
ないように見えた。

(こんなにもなつちまうもんなのか……)

そのとき、俺は激しい後悔に襲われた。

目の前で絶望を抱いている少年を、風呂本位なんかで見は来てしまった自分に。

そして、

(こいつを俺は……助けてやりたい)

俺はそう思った。

↓ side change - riku ↓

僕はあの日も一人、部屋の隅に佇んでいた。

ここ数日ろくな物も食べていなかつたが、そんなことはどうでも  
良かつた。

両親が死んだ……もう戻つてくることはない……。

僕の心は、空っぽになつていた。

(ドンドンドンドンドン)

ベランダの窓を叩く音が聞こえる。

(後見人の人かな?)

僕はベランダの方へと、ふらつく足を進めた。

冷静に考えれば、後見人の人が窓から来るわけがないとわかつた  
だろう。

けれど僕には、こんなことを理解する余裕すら無かつたのだ。  
だがそれが……その判断が、僕の運命を大きく変える。

ベランダのカーテンを開ける。

久しぶりの日光の光に、僕は思わず目をつぶつてしまつ。  
だがそのとき、部屋に写る影を見て外に誰か行くことに気がつく。

その方向を見てみると……

窓に男の子が張り付いていた。

(うわっ！…)

僕は驚き、思わず後ろに倒れてしまう。窓に張り付いていた男の子は、僕がいることに気づいたのか、しきりに何かを言つてくる。

(「…こ・を・あ・け・て・く・れ?」)

僕は、言われたとおり窓を開けた。

「ふうー。よつやく気づいてくれたな」  
「……誰?」  
「俺か?俺は風上一也だ。そんなことより、お前の力が必要なんだ」  
「僕の……?」  
「ああ、そうだ。というわけで、一緒に来てくれ……」  
「えつ……でも……」  
「大丈夫だ。何も心配はいらない。お前は俺に……いや、俺たちについてきてくれば良いだけだ」  
「俺……たち?」  
「そうだ。向こうに俺の仲間がいる。みんなもお前を待つている。だから一緒にいこう。またもう一度、外の世界へ!…」

初めて会う人だったけど、僕はなんだかこの人ならきっと、僕のことを救ってくれる。

そんな風に思つた僕は……

「…………うん。いくよ」

「よしーじゃあみんなのところへ行こう。」

「一也、ついていく」と云ったんだ。

「そのまえに……僕おなかが空いたよ」

「ははつ。じゃあまずは腹へなしからだなー。」

「…………うん。」

↓ side return ↓

「あの時、僕は一也に救つてもうつたんだ。両親を亡へし、絶望の淵にいた僕をね」

…………言葉じゃ表せないほどの驚きを覚えた。

こんなにも楽しそうな人たちの過去に、そんなことがあつたなんて思いも寄らなかつた。

「咲夜くんの悲しみは、きっともつと深いんだと思う。けれど咲夜くんは、僕とは違つて現実に絶望していない。きっと暫の中に、何か支えになる物があつたんだよね?」

…………ううだ。

「僕も何度も絶望しけた。けれど……僕にはこれが……ギターがあつたからこそ、絶望せずにいたんだ。僕にはギターだけが、唯一消えずにするんだ物だから」

そひ……逆にいえば……僕にはむづ、これしかないんだ。

「ならば。俺たちが次の挑戦者つてところかな  
「そーだな。あたしたちはそーなるのかな」

「…………えつ？」

「何度も言つてこるだらつ。俺たちはお前を、勧誘しにきたつて  
「うん。僕たちはいくつもの困難を乗り越えてきてるんだ。……あ  
の時だつて」

「でも…………また…………」

「空き教室からロープで屋上へるような連中が、そんなに簡単に死  
ぬと思つてゐの?」

「…………」

「いいのよ。無理しなくとも。もつと頼りなさい。もつと血脉を中心  
的に行きなさい。何が事故よ! どーんと来いよーーー!」

「いやいや、きちゃダメでしょ」

「そういう気分つてことよ、陸くん」

…………本当にいいのだらつか。

ほんとうにまた、人と時間を共有してもいいのだらつか。  
僕がそう思つていて、それを見透かしたかのように、風上がい  
つた。

「俺たちは決して同情や哀れみなんかで誘つてるじゃない。ただお  
前といふと、すげー楽しそうだからさ。だから咲夜、一緒に行こつ。  
もう一度……外の世界へーーー!」

風上が、僕に手をさしのべる。

周りで四人が頷き、僕に手をさしのべている。

僕は……

「うん… もうしかね… みんな… 」

その手をひとつ、また歩み出さうとした。

五人は大きく頷いた後、大きな声で笑いだした。  
僕もたまらず、みんなと笑いあつた。

丁度そのとき、夏休み終了のチャイムが鳴った。

「……ねえ、もうみんなでさぼっちゃわない？」

お、いし事言ひにやねが咲夜！」

野球か!! 紙芝居!! あたあああ!!

「まあいいんじゃないか?」

「咲夜くんもなんでそんなノリノリなのさ！？」

最高にうれしかった。

青空の下、またこんな風に騒げる日が来たことが。  
渴望していた日常を、青春を、与えてくれたこの人たちには、感謝の気持ちでいっぱいだった。

.....ルニシテル

「どうした？」

君が女は……いや、僕が女は何者なの？」

「おつと、言ってなかつたな。……そういうや、あん時もそう聞かれ  
たんだつけ」

『ねえ、一也くん。君たちはいつ たい何者なの?』  
『俺たちか…… そうだな。俺たちは、日常を楽しむためにある集団、  
人呼んで……』

『「デイリー・メイカーズだ!!』』

## 2・1 一也からの提案（前書き）

この作品はあくまでフィンクションです。  
実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定  
される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません  
ん。

## 2・1 一也からの提案

「なあ。俺たちつてもう二年だよな」

僕がデイリーメイカーズに入つてから半月ぐらい経つた。あれから僕たちは放課後、教室か屋上に集まるようになつていて。基本的には自由に過ごし、時折僕の演奏を聞いていたりした。たまに一也が何かを言い出し、それで遊んだりもしていた。

そして今回も、一也が何かの前ぶりのように切り出してきた。

「何を当たり前な」

「じゃなかつたら、あたしたちは何なんだ」

「急にびびつしたのや、一也」

慶助、美紗、陸が順に反応を返す。

「いやひ、もう俺たち今年から受験生だろ？ つてことは、いつして自由に遊んでいることも出来なくなつちまうじゃねーか」

「まあ、そうだね」

「私たちも、受験勉強しなきゃいけないのよね……」

僕はまだ半月ほどしか一緒に過ごしていないけど、一也して遊べなくなつてしまつことは、とても悲しいことだと思うくらいだ。きつとほかの五人は、僕以上に悲しい気持ちなのだろう。

「だからよ、この学校での最後の思い出として、俺は何かデカいことをやりたいと思っているんだ。ここ最近、何か大きな事をやってないしな」

確かにそうだ。僕は以前といつものあまり知らないが、この半月でやつた大きいことといえば、学校全体を利用したサバイバルゲームくらいだ。いや、それすらもこの人たちにとつては、小さな遊び程度なのだろうが。

「と、いつわけでだ。俺は今、猛烈にバカいことがやりたい！…」

同感だつた。おそらくみんなも同じ様に思つてこらのだろう。やれと同時に、これから一也がまた、何かおもしろいことをしようと考えてゐることもわかつた。

そして僕らは、それが始まることが楽しみになつてくる。だから僕らは、一也にいつ尋ねた。

「それで、いつたい何をしようとしているの？」

それは僕らの、一也の行動に対する肯定の合図でもあつた。それを受け取つた一也は、笑顔で僕たちに答えを返した。

「バンドだ、みんなでバンドを作るぞーー！」

「そして俺たちは、学祭の伝説になるーー！」

その言葉で、これから始まる物語の……僕たちの物語の、引き金が引かれた。

いくつもの形を束ねる、始まりの物語だ。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。これで、今日一日の授業は終わりだ。

僕は放課後に向けて、机の上に置かれている教科書をしまつ。

「やつと授業が終わったわね」

沙耶さん（僕がディリーメイカーズに入った時、みんなのことは名前で呼ぶよう強制されたので、今はそうして呼んでいる）が僕の机の方に歩み寄ってきた。

「今日は特に疲れた気がするよ

「ほんと。ずっと机に向かっているなんてね」

「実技科目、一つもなかつたもんね。今日」

「はあー、ずっと自習ならいいのに」

そう愚痴をつぶやきながら、僕の机の前で大きく伸びをする。

……かわいい。その一挙一動が絵になるかわいさだ。沙耶さんを風景画に取り込むだけで、きっとその絵はお花畠になるんだろうなと思った。ついでに鑑賞者の頭の中も。

「そういえば、一也は何をたくさんいたんだ？」

「さあ、一也の考へることなんて予測不能だわ」

「まあ……だよね」

その後「明日の放課後、俺たちの教室に集合だ。楽しみにしてろよー」と、一也は僕たちに言い残し、ロープを使ってこの場を去つて行った。

何でわざわざロープを使ったのかは、去り方がかつこいいからだ  
そうだ（本人談）。相変わらず訳のわからない。

まあそういう訳で僕たちは、具体的な話を何一つされていなかつ  
た。

「ま、とりあえず行こうか」

「そうね。聞けばわかるでしょ」

多少疑問が残るもの、聞けばわかるだろ？といつ結論に達した  
僕は、一也の教室へと向かうために席を立った。

「ん、きたか」

僕らが教室の入口についたことに気づいた一也が、僕らに教室に入  
るよう手を動かした。

「あれ、陸と美沙さんは？」

教室に入つてみると、その二人がすでにいなくなつていたので、  
それについて尋ねてみる。

「あの二人なら、もう先に行つてるぞ  
「なんでも、準備とやらがあるそつだ」

一人が交互に答えてくれるが、その中に一つ、何かを示すような単語が含まれているのに気づく。

「準備？　聞いてないわよそんなこと」

沙耶さんも同じ事を思つていたようで、代表して質問する。

「そういえば、一人は知らないんだつたな」

「その口調だと、慶助は何があるのか知つてるつて事？」

「そうなの？　するいじやない！　同じクラスだからつて先に知つてるつて！！」

沙耶さんが大声で抗議をすると、一人は顔を合わせ、そろつて苦笑いをした。

「いや……実はだな。今朝、美紗が学校に来るなりな」

（以下回想）

「お、美紗。今日は学校に来るの早いじゃないか」

「…………」

「ん、どうした？　美紗？」

「…………やく」

「ん？」

「勿体ぶらずに早く教えろぼけー……」

「うがつ……」

「 　　ところの感じで、いきなりハイキックを食らわせてきたんだ」  
「 「あー、なつとく」」

沙耶さんと声がかぶつた。なんか声がかぶるって、ちょっとうれしかつたりするよね。

「だからとりあえず、今からこいつと手伝うことに条件で、教えてやつたんだ」  
「そのときに、慶助たちも聞いたと」  
「そういうことだ」

まあ、確かにあの美沙さんの性格で、一寸お預け状態に耐えられるわけがないだろう。きっと家では悶々としていたに違いない。

悶々の使い方、違うかな。

「というわけで、只今あの一人はお手伝い中つてわけだ」

一也がそう締めくくつたとするが、僕の中には新たな疑問が浮かぶ。

「 なんで陸も手伝つてるの？」

すると今度は三人が、それも苦笑いではなく含み笑いのようなものをしていた。

え、もしかしてわからないの僕だけ？  
ロンリーボク……ちょっと寂しい雰囲気の肩書きだ。

「そういえば、咲夜に教えてなかつたな  
「いわれてみれば、そうだつたわね」

三人は、納得したよつにうなずいている。

「何？ なにか隠し事でもあるの？」

「そう言つ訳じやない。……まあ、咲夜は知つておくべきだりつ」

何だろ？ 何か僕が入る前にあつた事なのかな。

「なんとなく気づいていたかもしけないが、あの一人は付き合つて  
いるんだ」

「…………へ、まじ？」

「まじまじ」

……知らなかつた。いや、何となく仲良いなーとか思つてはいた  
が、まさか付き合つていたとは。

「意外と攻めるんだね、陸」

「いや、いったのは美沙の方からだ」

「ええ～！？」

あの美沙から！？ 一日のお預けにも我慢できない、カップゼリ  
ー大好きなあの美沙から！？

「いや、カップゼリーは関係ないだろ？」

モノローグへの的確なツツコミありがとう、慶介。  
しかしね。なにがあるかわからんもんだ。

「美沙ねらつてたのなら残念でしたね～。もつあの子、彼氏持ちよ

いや……まあ美沙さんもかなりかわいいけど僕としては……。

僕はそれとなく、沙耶さんの方に顔を向ける。

「…………？」

沙耶さんは全く気づいてくれなかつたが、男一人は気づいたようで、顔をニヤつかせている。

あ。一人が親指を突き立てながら、笑顔で任せると口パクしている。

……不安要素しか見あたらないと思っているのは、きっと僕だけじゃないだろう。うん、ものすごく不安だ。危険な空気が、僕を取り巻き始める。

「まあ、とつあえず行け」

そういって、一也は僕たちのことを促す。

「行くつて、屋上にかしら？」

「いや、屋上じゃない。行くのは俺たちの部室だ」

「「部室!-?」

またもや一人の声が被る。今のはまあノーカウント。驚かずにはいられないからね。

最後の最後まで教えてもらえなかつた僕らは、お互に首をかしげながら、一也の後についていくのであつた。

## 2・2 見つけ出した部屋（前書き）

この作品はあくまでフィンクションです。  
実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定  
される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません  
ん。

## 2・2 見つけ出した部室

教室を出た僕たちは一也と慶助につれられて、旧校舎の廊下を進軍中だった。

目標は不明、ただただ前進あるのみ。

この学校には校舎が一つある。

僕たちの教室や授業の際に使用する実習室などがある新校舎と、主に文化部の部室や空き教室が数多く存在する旧校舎がある。

ちなみに、僕たちが毎日のように通っている屋上は新校舎の方で、旧校舎の方は階段に机が積まれていて、全く通ることができない状態なのだ。

新校舎の屋上の方が、広くてきれいだしね。

「よし、着いたぞ。ここが俺達の部室だ」

どうやら到着した模様で、一也が一つの部屋の前で足を止める。その部屋の上には、

「……軽音部室？」

「こんな部活、うちの学校にあったかしら？」

この学校に転校してくる際、一通りの部活動には目を通したはずだが、そのような部活には全く覚えがなかつた。

「まあ、去年廃部になつた部活だしな。それまでもほとんど活動なんていなかつたようだしな。知らなくて当然だろつ」

一也の答えを聞き、僕が知らないことに納得する。  
この学校に転校してきたときには、既になくなつていたのか。

「よくこんな場所が見つかったわね」

「バンドを始めるにおいて、必要なものがそろつている場所はないかと探してたらな。運良くこの部室が見つかったんだ」

「大変だったでしょ、それ」

「なに、俺はこういうことが得意だからな。むしろ楽しいくらいだつたぜ」

さすがは一也だと思った。

この半月で、リーダーである一也の性格がだいぶ掘めてきていた僕は、あらためて一也の凄さに感服した。

「ま、とりあえず中に入るぞ」

そういって一也は扉を開け、僕たちを中へと招き入れた。

「意外と広いんだね」

僕がこの部室（？）に入つて、最初に抱いた感想だった。

部屋の中にはカラー・ボックスが一つと机がいくつか。それ以外はなにもない所為で、よけいに部屋が広く見えた。

「元はこの部屋も教室の一つだったんだ。確か旧視聴覚室だったはずだ」

「それならかなり広くても納得がいくわね」

「よくこれだけの部屋を、活動なしの軽音部がとれたものだ」

「結成当初はかなりの人気だつたらしいぞ、慶助。まあ、それも十  
年くらい昔のことだがな」

「その当初の栄光のおかげで、この部室に居続けられたってどこか  
「じゃあもう軽音部がなくなつた今、どこかほかの部活がここを部  
室にしようと思つたじゃないの？」

「その前に俺がこの部屋を押された。だから心配することはない、

咲夜

「さすがは一也だ」

「手回しが早いことね」

一也の活躍のおかげで、ビーツやら僕たちのはこの部室を手に入れた  
らしい。

「いつにいつとのすぐできる一也には、常に感謝しつぱなしだった。

「そういえば、楽器はまだ無いの？」

「ああ、それについてなんだが……」

一也が何かを言いかけたとき、丁度一也の携帯が鳴り出した。

「おっ、もう終わったのか。……もしもし、俺だ。……さすが陸と  
美沙、仕事が速い……了解、今から向かう……大丈夫だつて。男手  
が四人もいるんだ。何とかなるさ……おう、それじゃあな」

一也が携帯を閉じ、再び僕の方を向く。

「というわけで、陸たちの準備が整つたらしいからな。今から一人  
の元へ向かうぞ」

「どういう訳なのか、さっぱりわからないわよ

「あれ？ 今説明しなかったっけか？」

「その説明の途中で電話が来たんじゃないのー。」

「そーだつたそーだつた。悪い悪い」

一也、たまにこういう大事なところを抜いて、結論だけをいつてしまつ癖がある。

あいつとせつからちな性格なんだろうと僕は思つてゐるが。

「けれどまあ、もう準備が整つたとなれば現地で説明した方が早い。ちゃんと向こうで説明するから、今はとにかく行こうぜ。一人をあまり待たせるわけには行かないからな」

またもや重要なことを隠された状態で、一也は部屋の外へと歩き出す。

慶助もそれに従つて教室を出ようとす。

「とりあえず……どうする？」

「行くしかないでしょ。はあ……なんであいつは、いつも勿体ぶつて話すのかしら……」

「あつはは……それを楽しんでいる節もあるしね」

「今度、私たちが何かあいつをじらすようなことをしてやりたいわ

「とにかく行こうか。どこに行くのかはわからないけど」

「気分はミステリーツアーってところね」

「そう考へると楽しいかも」

知らない場所（といつても校内だが）を旅するツアーミスの僕たちは、一也という勿体付けるガイドの元、次の目的地へと足を進めるのであつた。

一也に連れられて向かった先は、一つ上の階にある教室だった。教室の扉には大きな張り紙があり、そこには「軽音楽部倉庫につき立入禁止」と、書かれていた。

「ここにあにゅうには仕事をしてもらつてたんだ……陸、入るぞ?」

ひとこと断りをいれた一也が、教室の扉を開く。

この教室は何か特殊なことに使われていたらしく、教室二部屋分の広さがあった。

「「「おおう……」「」」

けれど、僕以外の三人から漏れた驚愕の声は、それとは違う別のことからきていた。

教室内には、ギターにベースにキーボード、他にも、アンプやマイク、ドラム等のバンドに必要な器具が、総計数十個以上もきれいに並べられていた。

企画者であり仕事を頼んだ張本人である一也も、さすがにこの数は予想していなかつたらしく、驚きを隠せないでいた。

「いや、まさか……。こんなにもあつたとは」  
「陸も美沙も、さぞかし大変だつただろ?」

一也が素直に感想を漏らし、慶助が労いの言葉を掛ける。

「ああ……しょーじき、かなり疲れた」  
「美沙がんばつてたもんね」

「ああ、いくつか壊してしまったがな……」

「あつはは……あれは仕方がないよ」

いつも強がってせんぜん平氣だと言い張る美沙さんが、素直に疲れたといったあたり、よほど大変だったのだろう。

隣で美沙さんを労る陸も、かなり疲れた表情をしているし。

「二人とも、お疲れさま」

「ん、がんばつた」

「うん、ありがとうみんな」

「礼を言つのは、むしろこいつちだがな」

陸と美沙さんの顔に、活力が戻つてきている気がした。

「んで、これだけの楽器を、一体どうするんだ? まさか、全部運ぶわけではあるまい」

「この量を運ぶなんて……無茶だわね」

「陸と美沙さんはもう、疲れて動けないだろ? からね」

「そんなことはない! 私はまだまだ元気だ!」

美沙さんが反論してくるだけの体力が戻つてきたころ、慶助が今後についてを一也に尋ねた。

「さすがにこの量を運ぶのは無理だ。それに、Uの中の全部が全部、使えるとは限らない。壊れているものもあるだろ? しな」

「確かに……いくら廃部したのが去年とはいえ、きっともつと前か

ら備品としておかれていたのもあるだろうしね

「アン、……だったかしら？ そういう機会だつて、音がでるとは考えづらいわね」

一也の冷静な分析に、陸と沙耶さんが反応する。

機会系にめっぽう弱い美沙さんと慶助は、お前たちに任せるとこう態度で話を聞いていた。

「と、いつわけだ。今から俺達で、それぞれの楽器や機材がきちんと動くかどうかを確認したいと思つ」

それを聞いた瞬間、美沙さんと慶助があからさまに嫌そつな顔をした。

「そう露骨に嫌そつな顔をするな、一人とも。ぶつちやけ俺だつて、壊れているのかを見分けるのだつて難しい。ギターはやってみたことはあるが、他はさつぱりだからな」

「じゃあ一体どうするつていつの？」

沙耶さんが質問をすると、一也が僕の方を向き、僕の肩をつかんできた。

「俺達には今、ここに楽器のスペシャリストがいる！ 今回ほんのスペシャリストにお願いし、ここに楽器の点検をしたいと思つ！」

四人が一齊に、おおーといった顔をする。

「まあ、いうなるとはわかつたけどさ……この数を全部僕がやるの？」

「俺達もこりいろ指示されれば手伝えるが、なにをすればいいかを

知っているのは咲夜だけだ。よろしく頼むぜ

「いや……まあ、いいんだけど……」

さすがに一人で数十個を確認するのは、無謀じゃないのかな。

「安心しろ。お前には特別給「J」をつけたやるから」

「これからこれはバイトになつたのさ」

「そうだな……時給950円でどうだ?」

「そういう問題じゃないでしょー? あと金額がかなり現実的だね

!」

「それくらいのことはしてやるつてことだ。何なら、沙耶をお前にあげてやつてもいいぞ?」

「沙耶さんをそんなホイホイと使わない!..」

「じゃあ逆に脅迫だ。沙耶を安易に売り出してほしくなければ、全て頼まれてくれるか?」

「外道だ! 外道な人がここにいます!」

一也にさんざんにいじられ、周りのみんなが笑い出す。

一也の「冗談だとわかつていても、つっこまずにいられないのはきっと性分なんだろう。

「まあ冗談はさておき、今度なにかしらで埋め合わせはしてやるから。な、頼む!」

一也が両手をあわせて僕を押し倒す。

「いや、別に元から手伝つ気ではいたけど……まあ埋め合わせの方は、期待せずに待つよ」

「よし、じゃあ決まりだな。お前らー。今から咲夜の指示に従つて、順に点検作業を開始する!」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

陸、慶助、美沙さん、沙耶さんが、それぞれ行動を始める。まだ指示を出していないのに、各自適当に楽器をいじり始める。よほど触つてみたかつたんだろう。

年以来から「じみ出る、好奇心を抑えよつともしないその姿は、まるで新しいおもちゃを買ひ『えられた子供のような姿であった。

「咲夜、あいつらが楽器を壊してしまった前に、指示と点検を始めてくれ。俺はもう前二十分をしつづけて、手遅れにならぬよう心がけた

「わかつたよ、一也。…………えーと、それじゃあがんばるよ。」

デイリーメイカーズみんなで始めた点検作業は、完全下校時刻ぎりぎりまで費やして、ようやく終えることができた。

## 2・3 そして新たなる挑戦が始める（前書き）

この作品はあくまでフィンクションです。  
実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定  
される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません  
ん。

## 2・3 そして新たなる挑戦が始める

「いやー。思いの外、時間がかかっちゃったな  
あの量を咲夜くん一人に点検させたからよ……咲夜くん、疲れて  
ない？」

「僕は大丈夫だよ。それよりも……美沙さんの方が……」

「陸……あたしはもう……やりきったんだよな……」  
「うん、そうだよ。美沙は本当にがんばったよー！」  
「そうか……それ……は……よか……った……」  
「美沙！だから道路で寝オチしちゃダメだつてばーーー！」

「……なんか、美沙さんが死ぬ寸前みたいだね」  
「あいつ、やり遂げた顔をしてるぜ……」  
「武士の末路のようだな……」  
「美沙、よほど疲れてたのね」

完全下校時間がきてしまった僕たちは、ひとまず使えるものを厳選した楽器を運ぶのは明日にすることにし、僕たちは下校をしている途中であった。

だんだんと日が沈む時間が遅くなっているとはいって、まだ五月の半ばでしかないこの時期は日の進みも早く、あたり一面は夕焼けの光で赤く染まっていた。

「さて……鈴が寝てしまつ前に、俺から今日一番の重大発表がある」

「今日は発表の連続だね」

「今日はこれが最後だ。まず一つ、俺たちのやるバンドのパートを

発表したいと思う!」

卷之三

「もう一也の方で決めていくくれたんだ」

僕も楽器点検をしている時から、誰がどのパートをやるのか気に  
なってたんだよね。

「まずはギター、まあわかつてはいるだろ? が俺と咲夜が担当だ」「咲夜はギターのスペシャリストで、一也は元ギター経験者だからな」

「適任つて感じよね」「頼んだぞ、咲夜」「うん、精いつぱい頑張るよ」「

「僕がベースか……咲夜、わからないといふのがあつたら、その都度  
ようしくね」

「陸、がんばれな……ムニヤ」「

「美沙！もう少しだから、ね！」

「そしてドラム担当は、慶助！ お前だ！」

「よっしゃ来たあああーー！」

慶助、すごいドラマをやりたそうにしてたもんね」「ううパリ、ソノヌヌンダヨソトコガニ

「慶助すごい元気ね」

「次にキーボード担当……美沙だ！」

「美沙、ピアノの経験者だものね」

「へえ～、それは知らなかつたよ」

「…………すぴー（寝息）」

「美沙、歩きながら寝ちゃつたよー…？」

「器用な奴だな……」

「美沙、起きて！ 起きて！」

「うう……あたしは一体……」

「よかつた……起きたよ」

「最後にバンドの花形ボーカルは……沙耶、お前だ！」

「私がボーカル……がんばつてステージを盛り上げて見せるわ！」

「お前の美声に期待しているぞ」

「沙耶、ボーカルがんばつてね」

「まつかせなさい！ 咲夜くんだけがスペシャリストじゃないって、教えてあげるわよ！」

「沙耶は歌が上手だからな～」

「カラオケで、99・999点を繰り出した実力者でもあるからな

「それすぐ…」

「もう一つ、俺から大事な発表がある  
「もう一つ？」

もう一つの発表つて、一体なんだろつか。

沙耶が相手のセリフをそのまま繰り返して尋ねると、一也が何か

新しい遊びを思いついたときにする、悪い笑顔になつた。

「これはあれだ……きつとまた何か、一也はとんでもないことを言い出すに違ひない。

「僕がそう思いながら答えを待つと案の定、一也はとんでもないことを発表した。」

「文化祭でオリジナル曲一曲の、完成発表会を行つからな」

「文化祭で！？」「文化祭で！？」「文化祭で！？」「文化祭で！？」

「ああ！ やはりやるからには、たくさんの密に見てほしいもんだろー！」

「でも文化祭つて来月末だよ！？」

「あと一ヶ月半しか無いぞ！？」

「俺と陸は素人だぞ！？ 大丈夫なのか！？」

「僕はまだしも、他のみんなは一ヶ月半つて……日程的には大丈夫なんだろうか。」

「なに、俺達には咲夜がいる。余裕だつて」

「あー、それなら安心だ」「」「」「」

「さつきから思つてたんだけど、何でそんなに僕を盲目的に信頼してくれるの？」

「信頼してくれることはとてもうれしいのだが、これほどまでに信頼されることを、何かしただろうか。」

「そりやあ咲夜、あれだよ」

「咲夜くんが私たちの仲間だからよ」

「仲間……」

「それに、咲夜は音楽のスペシャリストだからな」

「咲夜の音楽の知識は、僕たちの誰よりも信じられるからね」

「みんな……」

単純にうれしい、僕はそう思つた。

仲間だというだけで信頼してくれる彼ら。僕はそんな彼らの期待に応えたい。僕をその仲間に加えてくれたみんなからの信頼に応えたい。

心の中で、絶対に成功をせよ! といふ持ちが済も上がりってきた。

「もちろんだー」  
「うん……文化祭、がんばりうねー」

「俺も本番までには、ドラムのスペシャリストになれりゃ練習だ

「僕もみんなについていけるようがんばらないと」

「あたしの腕を見せつけてやる！」

密に見せてやるわー」「

みんなの心も固まり、本格的にやる気が出始めてくる。

「最後に一つ、今日結成されたバンド『ディイリー・マイカーズ』で、文化祭を盛り上げてあるひうぜー！」

中学校生活最後のイベントに向けて、僕らは今、走り出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5848y/>

---

デイリーメイカーズ

2012年1月12日20時59分発行